



岩波文庫

33-158-1

君たちはどう生きるか

吉野源三郎著

岩波書店

君たちはどう生きるか

1982年11月16日 第1刷発行 ©

定価 450 円

著 者 よし の げん さぶ ろう
吉 野 源 三 郎

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式 会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

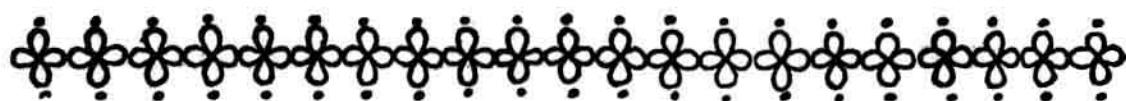
岩波文庫

33-158-1

君たちはどう生きるか

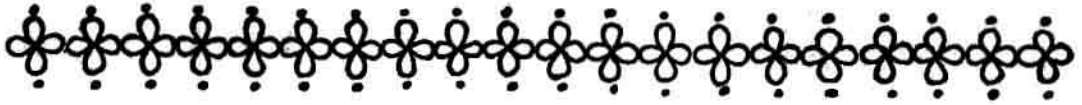
吉野源三郎著





目次

まえがき	五
一、へんな経験	一〇
もの見方について(おじさんのノート)	二三
二、勇ましき友	二九
真実の経験について(おじさんのノート)	四九
三、ニュートンの林檎と粉ミルク	五九
人間の結びつきについて(おじさんのノート)	八八
四、貧しき友	九九
人間であるからには(おじさんのノート)	一二七
五、ナポレオンと四人の少年	一四三
偉大な人間とはどんな人か(おじさんのノート)	一七五

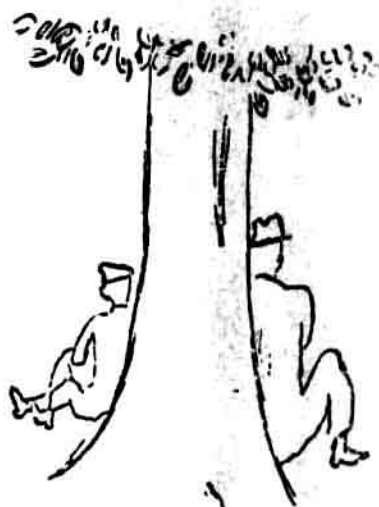


- 六、雪の日の出来事……………一九六
- 七、石段の思い出……………三三二
- 人間の悩みと、過ちと、偉大さについて(おじさんのノート)……………二四九
- 八、凱旋……………二五八
- 九、水仙の芽とガンダーラの仏像……………二七二
- 十、春の朝……………二九五

作品について……………(吉野源三郎)……………三〇一

『君たちはどう生きるか』をめぐる回想……………(丸山真男)……………三〇七
 — 吉野さんの霊にささげる —

(挿絵 脇田和)



まえがき

コペル君は中学二年生です。

ほんとうの名は本田潤一ほんだじゆんいち、コペル君というのはあだ名あだなです。年は十五ですが、十五にしては小さい方で、実はコペル君も、かなりそれを気にしています。

毎学期のはじめ、体操の先生が全級を整列させて、帽子ぼうしを取らせ、背の高さを見て整列の順を変えるとき、コペル君はそつと砂利じやりの上に靴のかかとを乗せたり、出来るだけ首をのばしたりして、なんとか順序を繰りあがろうと苦心するのですが、成功したためしがありません。「ガッチン」というあだ名あだなのある北見君きたみと、いつも二位、三位を争って、お互いに抜いたり抜かれたりしています。むろん、ビリからです。

ところが、成績の方からいうとその逆で、たいてい一番か二番、三番と落ちたことはめったにありません。この方は、もちろん、ほんとうの成績順で数えてです。といって、コペル君は点取虫てんとりむしの勉強家というわけではなく、どうして、遊ぶことは人一倍好きな方です。野球では、

クラスの選手になっています。ちっちゃなコペル君が大きなグローブをはめて、二塁を守っているのは、なかなか愛嬌あいきょうがあります。何しろ体が小さいので、打撃だげきの方は強打者ではありません。んけれど、でもバントがお得意で、おかげでいつも二番打者に据えられています。

成績が一番か二番というのに、コペル君は、いまだかつて級長になったことがありません。それは、みんなの人望がないからというよりも、少々コペル君のいたずらが過ぎるからです。修身の時間に、先生にかくれて、糸でつないだ二匹の甲虫かぶとむしに綱引をさせて喜んでるようでは、コペル君を級長にするわけにはいかないじゃありませんか。父兄会のたびに、受持うけもちの先生がコペル君のお母さんにいわれる言葉は、いつもきまっています。

「学業の方は、なにも申しあげることはありません。非常に優秀な成績で、こんども首席を占めておられるようなわけです。ただ……」

この「ただ……」が出ると、お母さんは、またかと思えます。このあとにつづくのは、いつだって、コペル君がどうもいたずら好きでこまるというお話だからです。

もっとも、コペル君のいたずらがやまないのは、ひとつはお母さんの責任かも知れません。お母さんは、父兄会から帰って来ると、「また先生の御注意を受けましたよ。」と行って、コペル君によく言いきかせるのですが、それがどうもきびしくないので、実をいうと、お母さんには、こういうことできびしい小言こごんをいうことが出来ないのです。

なぜかというのと、大体、コペル君のいたずらというのが、人をこまらせたり、いやがらせたりするような、ひねくれたものではなくて、ただ人を笑わせて喜ぶ、いたって無邪気なものだからですが、そのほかに、もう一つ大きな理由があるのです。それは、コペル君にお父さんがないということです。

コペル君のお父さんは、二年ばかり前になくなりました。大きな銀行の重役だったお父さんがなくなったのち、コペル君の一家は、それまで住んでいた旧市内の邸宅から、郊外の小ぢんまりした家に引越しました。召使の数もへらして、お母さんとコペル君の外には、ばあやと女中が一人、すべてで四人の暮しになりました。お父さんの生きていた頃とちがって、訪ねて来る人も少なく、うちの中が急にさびしくなってしまうました。そうなってから、お母さんの一番の心配は、このためにコペル君が快活でなくなったりしては、ということでした。それで、お母さんは、コペル君のいたずらを、あまりきびしく叱ることが出来ないのです。

郊外に越してからは、近所に住んでいる叔父^{おじ}さんが、ちよくちよくたずねて来ます。その叔父さんは、お母さんの本当の弟で、大学を出てからまだ間もない法学士です。コペル君も、よく叔父さんのうちに遊びにゆきます。二人はたいへん仲よしなのです。人並以上背^せの高い叔父さんと、小さなコペル君と、二人が並んで散歩しているところを、近所の人はよく見かけます。原っぱで二人がキャッチボールをしていることもあります。

もともとコペル君というあだ名は、この叔父さんが製造したものです。そして、ある日曜日、学校友だちの水谷君がうちに遊びに来たとき、ちょうど叔父さんも来ていて、しきりに「コペル君」「コペル君」と、コペル君をふりまわしたものですから、それ以来、この名が学校にも伝わってしまいました。

「本田はね、うちじゃあ、コペル君と呼ばれてるんだよ。」

と、水谷君が学校に来ておしゃべりしたため、学校の連中までコペル君と呼ぶようになったのです。今では、お母さんまで、ときどき「コペルさん」などと呼びかけます。

しかし、なぜ「コペル君」というのか。そのわけを知っている者は、友だちには一人もありません。みんな、わけは知らないで、ただ面白がってこう呼んでいるのです。当のコペル君に、

「なぜ、君のことをコペル君というの。」



と、たずねても、コペル君は笑うだけで、その説明は決してしません。でも、こうたずねられるとき、コペル君の顔つきは、なんだかうれしそうに見えます。それで、友だちは、なお一層、わけを知りたくなるのでした。

みなさんだって、この点では、コペル君の友だちと同感にちがいありません。そこで、まず、コペル君の名の起りから、話しはじめることにしましょう。それから、順々に、コペル君の頭の中に起こった奇妙な出来事を、みなさんに報告してゆくことにしましょう。なんのために、そんな報告をするのか、それは読んでゆくうちにわかります。

一、へんな経験

コペル君がまだ一年生だった去年の十月×日、午後のことです。コペル君は、叔父さんと二人で、銀座のあるデパートメントストアの屋上に立っていました。

降っているのか、いないのか、見分けにくいほど細かな霧雨が、灰色の空から、静かに絶え間なくおりて来て、コペル君の外套にも、叔父さんのレインコートにも、いつの間にか、霜をおいたように、小さな銀色の水玉がいっぱいにつきました。コペル君は、黙ってすぐ下の銀座通りを見おろしていました。

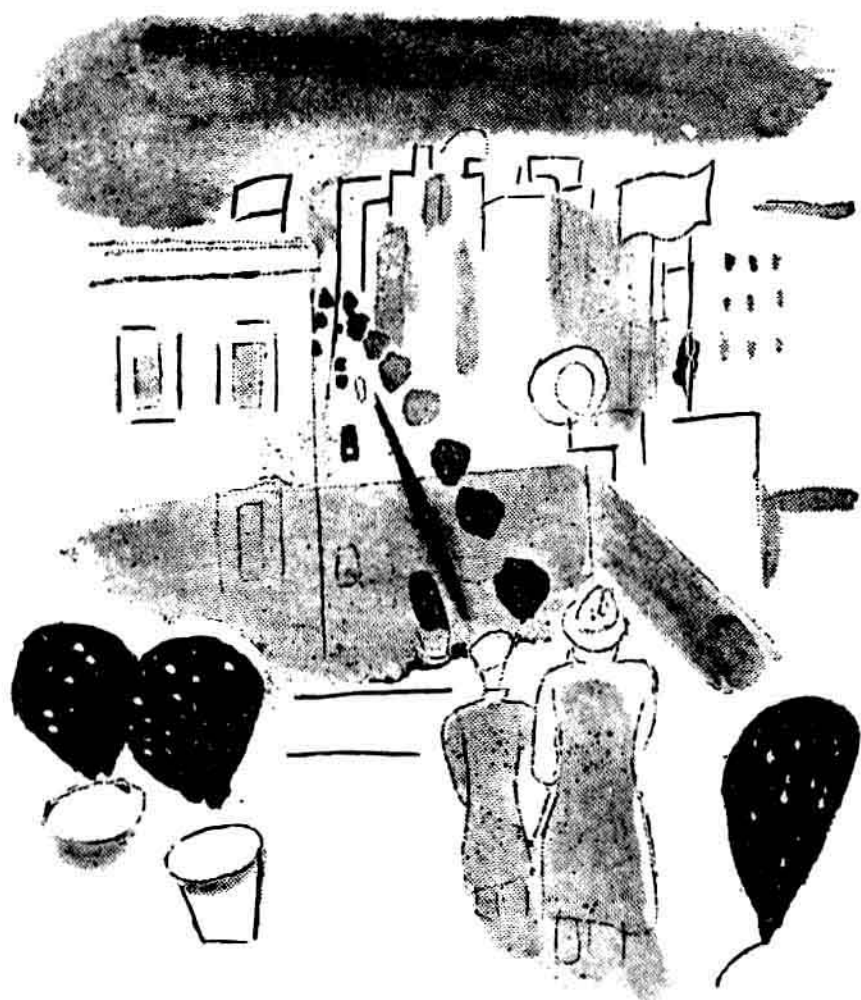
七階建の上から見おろす銀座通りは、細い一本の溝でした。その底を、たくさんの自動車が、あとからあとから続いて流れてゆきます。右側は日本橋の方から、すぐ眼の下を通過して新橋へ、左側はそれと逆行して日本橋の方へ、二つの流れがすれちがいに、太くなったり、細くなったりにして動いてゆきます。二つの流れの間には、ところどころに、電車がいかにももの憂そうに、のろのろと走っていました。玩具のように小さく見える、その電車の屋根は濡れていました。いや、自動車も、アスファルトの路面も、立並ぶ街路樹も、何もかもみんなびっしりと濡れ

て、どこからともなくさして来る、昼間の明るさを映して光っていました。

黙って見おろしているうちに、コペル君には、一つ一つの自動車が何か虫のように思われて来ました。虫とすれば甲虫かぶとむしです。甲虫の群むれが大急ぎで這はって来るのです。用のすんだ虫は、また大急ぎで戻ってゆきます。何か知れませんが、彼らにとって大事件が起こっているにちがいありません。———そういえば、銀座通りが次第に遠く狭くなって行って、やがて左に折れて、高いビルディングの間にかくれてしまふ京橋きょうばしのあたりは、彼らの巢の出入口のように見えるではありませんか。大急ぎで戻っていったやつは、そこで一つ一つ姿をかくします。すると入れちがいに、新しいやつが、あとからあとから、急いで繰りだして来ます。黒いやつ、黒いやつ、また黒いやつ、今度は青いやつ、灰色のやつ……

粉のような霧雨は、相変わらず静かに降りつづけていました。奇妙な想像にふけりながら、コペル君はしばらく京橋のあたりを見つめていましたが、やがて顔をあげました。眼の下には、———雨に濡れた東京の街が、どこまでも続いて、霧雨の中に茫々ぼうぼうとひろがっていました。

それは、見ているコペル君の心も沈んで来るような、暗い、寂しい、果もない眺めでした。眼のとどく限り、無数の小さな屋根が、どんよりとした空の明るさを反射しながら、どこまでもつづいていました。その平らな屋並を破って、ところどころにビルディングの群むれがつつ立っています。それは、遠いものほどだんだんに雨の中に煙って行って、しまいには空と一色の霧



の中にぼんやりと影絵になって浮かんでいました。なんという深い湿気でしたらう。何もかも濡れつくし、石さえも水が浸みとおっているかと思われました。東京は、その冷たい湿気の底に、身じろぎもしないで沈んでいるのでした。

東京に生まれて東京に育ったコペル君ですが、こんなまじめな、こんな悲しそうな顔をしている東京の街を見たのは、これがはじめてでした。しめっぽい空気の底から、絶えず街の雑沓が湧きあがって来て、七階の上の屋上まで、のぼって来ましたが、それも耳にとまるのか、とまらないのか、コペル君はじつと瞳を投げたまま、そこに立ちつくしてしまいました。なぜか、眼が離せなくなってしまったのです。すると、コペル君の心の中に、今までにはなかった一つの変化が起こって来ました。

——実は、「コペル君」という名の起りも、このときコペル君の心に生じた、その変化に係があるのです。

最初にコペル君の眼に浮かんで来たのは、雨に打たれている、暗い、冬の海でした。それはコペル君がお父さんといっしょに、冬休みに伊豆いずに出かけたときの思い出が、よみがえって来たのかも知れません。霧雨きりさめの中に茫々ぼうぼうとひろがっている東京の街まちを見つめているうちに、眼下の東京市が一面の海で、ところどころに立っているビルディングが、その海面からつきでている岩のように見えて来たのでした。海の上には、雨空が低く垂れています。コペル君は、その想像の中で、ぼんやりと、この海の下に人間が生きているんだ、と考えていました。

だが、ふとその考えに自分で気がつく、コペル君は、なんだか身ぶるいがしました。びつしりと大地を埋めつくしてつづいている小さな屋根、その数え切れない屋根の下に、みんな何人かの人間が生きている！ それは、あたりまえのことでありながら、改めて思いかえすと、恐ろしいような気のすることでした。現在コペル君の眼の下に、しかもコペル君には見えないところに、コペル君の知らない何十万という人間が生きているのです。どんなにいろいろ人間がいることか。こうして見おろしている今、その人たちは何をしていますのでしよう。何を考えているのでしよう。それは、コペル君にとって、まるで見とおしもつかない、混沌こんとんとした世界でした。眼鏡めがねをかけた老人、おかつぱの女の子、まげに結ったおかみさん、前垂まえだれをしめた男、

洋服の会社員、——あらゆる風俗の人間が、一時にコペル君の眼にあらわれて、また消えてゆきました。

「叔父さん。」

と、コペル君は話しかけました。

「いったい、ここから見えるところだけで、どのくらい人間がいるのかしら。」

「さあ。」

と言ったまま、叔父さんにも、すぐには返事が出来ませんでした。

「だって、ここから見えるところが、東京市の十分ノ一とか八分ノ一とか見当がつけば、東京市の人口の十分ノ一とか八分ノ一とかが、いるわけじゃない？」

「そうはいかないさ。」

叔父さんは、笑いながら答えました。

「東京の人口というものが、どこでも平均して同じなら、君のいうとおりさ。だが、実際には人口密度の濃いところもあれば、薄いところもあるからね、面積の割合で計算するわけにはいかないんだ。それに、昼と夜と違って、人間の数はたいへんちがうんだよ。」

「昼と夜？ どうして、ちがうのさ。」

「そうじゃないか。僕や君は東京の外側に住んでいるね。それが、いま現に、こうして東京

の真中に来ているだろう。そうして、夜になればうちへ帰ってゆくじゃないか。そういう人が、ほかにもどのくらいいるか知れないんだぜ。」

「……」

「今日は日曜日だけど、これがふだんの日だと、ここから見渡せる、京橋、日本橋、神田、本郷を目がけて、毎朝、東京の外側から、たいへんな人数が押しかけて来る。そして、夕方になると、それがまた一時に引上げてゆくんだ。省線電車や市電やバスが、ラッシュアワーにどんなに混むか、君だって知ってるだろう。」

コペル君は、なるほどと思いました。叔父さんは、つけ加えていきました。

「まあ、いって見れば、何十万、いや、ひよっとすると百万を越すくらいな人間が、海の潮のように、満ちたり干たりしているわけさ。」

霧のような雨は、話をしている二人の上に、やはり静かに降りそそいでいました。叔父さんも、コペル君も、しばらく黙って、眼の下の東京市を見つめました。チラチラとふるえながらおりて来る雨のむこうに、暗い市街がどこまでもつづいているばかり、そこには、人っ子ひとり、人間の姿は見えませんでした。

しかし、この下には、疑いもなく何十万、何百万の人間が、思い思いの考えで、思い思いのことをして生きていたのでした。そして、その人間が、毎朝、毎夕、潮のようにさしたり引い